

令和7年度第1回

札幌市男女共同参画センター運営協議会

会 議 錄

日 時：2025年8月18日（月）午後3時開会
場 所：札幌エルプラザ公共4施設 2階 会議室1・2

1. 開　会

○事務局（佐藤主任）

本日は、お忙しい中をご出席いただきまして、ありがとうございます。

令和7年度第1回札幌市男女共同参画センター運営協議会を開催させていただきます。

進行を務めさせていただきます公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会市民参画課主任の佐藤と申します。よろしくお願ひいたします。

開会に先立ちまして、札幌市男女共同参画センターの指定管理者であります公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会市民参画部長札幌エルプラザ公共4施設館長の高坂よりご挨拶申し上げます。よろしくお願ひいたします。

○高坂部長　皆様、こんにちは。

ただいまご紹介いただきました札幌エルプラザ公共4施設館長の高坂でございます。

本日は、お忙しい中、札幌市男女共同参画センター令和7年度第1回運営協議会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

この札幌市男女共同参画センターという施設は、昭和56年12月の札幌市婦人文化センターの開設に始まり、平成4年4月には女性センターと名称が変更されております。平成15年には、今日お越しいただきました札幌市北区の北8条西3丁目に施設が移転しまして、名称のほうも札幌市男女共同参画センターに変わってございます。その移転の当時は、発展的解消という表現で語っていたというふうに記憶をしております。

そして、この男女共同参画センター開設当初からこちらの施設を管理運営させていただいておりますのが、私ども公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会でございます。

当財団は、人とのつながりによる魅力あふれる未来社会の創造を経営理念に、様々な事業を展開しているところでございますが、施設の管理につきましては、このセンターが入っております札幌エルプラザ公共4施設をはじめ、札幌市内の児童会館、ミニ児童会館、若者支援施設、野外施設、こども人形劇場こぐま座、やまびこ座、また、市外につきましては千歳市の児童館など、多様な施設を運営させていただいている、そのような財団でございます。

男女共同参画センターでは、性別によって制限されることなく、全ての市民が自分らしい生き方を選択し、行動できる社会というものをビジョンに掲げております。指定管理者として管理運営を行っております。指定管理期間につきましては、今期が第5期に当たっておりまして、期間は5年間ですが、ちょうどその真ん中の3年目に当たっております。

近年、ジェンダーという言葉が広く知られるようになってまいりましたが、その一方で、それぞれの理解や関心の度合いには大きな差があります。また、社会的立場や経験の違いから、残念ながら分断が生まれるというような課題も見受けられております。どのように伝えることで理解を広げていくことができるかなど、皆様のお知恵をお借りしながら共に考えてまいりたいと思っております。

本協議会は、センターの管理運営や事業運営について協議することを目的としており、

本日は、令和6年度の取組の報告と令和7年度の経過についてご説明させていただきます。委員の皆様には、各分野でのご専門の立場から忌憚のないご意見を賜り、今後の運営に反映してまいりたいと思っております。

簡単ではございますが、開会のご挨拶とさせていただきます。

本日は、どうぞよろしくお願ひいたします。

2. 委員紹介

○事務局（佐藤主任） 次に、札幌市男女共同参画センター運営協議会委員の皆様をご紹介いたします。

皆様には、ご自身の所属、お名前、ご専門、これまでの活動など、お一人2分程度で自己紹介をお願いいたします。

それでは、稻葉委員より時計回りでお願いいたします。

○稻葉委員 初めまして、稻葉哲治と申します。このたびは、よろしくお願ひいたします。

私は、ただいまナカフライフマネージャーという名刺をお配りしましたが、これは、地域活性化企業人という総務省の仕組みがございますけれども、男女共同参画やジェンダー、ダイバーシティに関するコンサルテーションなどをしている株式会社アワシャーレという会社に所属して、そこの人間として北海道の中富良野町に入りました、町の男女共同参画施策や関係人口の創出といったことを推進しております。

また、月の半分は東京の新宿において、そちらでも、ジェンダー、ダイバーシティに関する事業として、一つは、企業の女性役員をどういうふうに増やしていくのかというサポート、紹介事業や、コンサルの仕事をしたり、あと、この22年、日本でD&Iを推進しているNPO法人G E W E Lという団体がありまして、その理事も6年ほどやっており、そういうところでも各企業への様々なサポートを行っております。

また、札幌市もフェアトレードタウンになっておりますが、フェアトレードやエシカルに関する事業ということで、こうした活動もずっとやっております。近頃、鎌倉市が日本で7番目のフェアトレードタウンになりましたが、そこのフェアトレードタウン化の代表もやっておりました。

そういうことで、様々な社会課題に関する事業や取組をやっております。よろしくお願ひいたします。

○岸本委員 今、北海道大学の農学部の学部3年生として通っている岸本結希と申します。

私は、実は出身が札幌ではなくて、大学のために札幌に引っ越してきて住んでいる状態なので、ちょっとよそ者という感じではあります。大学に入る前は、10歳から15歳がアメリカ、15歳から高校3年間は東京と、どちらもすごくリベラルな環境で過ごしていました。ただ、今、大学で北海道に引っ越して、農学部の生物環境工学科というところで勉強していますが、すごく工学寄りの内容の学科なので、どうしても男子学生のほうが多いし、女性の教授は一人もいない環境です。なので、何か、すごくこれを変えなければな

らないのではないかと感じるようになって、自分で学校の外でそういう活動を探しているいろいろ活動しているという状況です。

今、やっていることとしては、東京にあるN P O 法人W a f f l e という団体で、日本の、特に地方の中・高生にプログラミングの機会を届けるような活動のインターンをさせていただいたり、また、プラン・インターナショナルジャパンというN G O のユースグループのアドバイザリーとして、組織の内部に対してユースの目線からこういうふうにしたらよくなるのではないかという意見を言う活動もしています。

私の大きな目標として、やはり、女性のエンパワーメントというものがすごく大きくあるので、今、大学で仲間を探して、北海道の地方の子たちに対して何かアクションを取れないかということで、ちょうど活動を始めようと準備しているところです。

本当に、皆さんにはいろいろな経験をされている中で、私はすごく経験が少なくて、役に立つ意見が言えるかちょっと不安ですが、大学生としての目線を伝えられたらいいかなと思っています。今日は頑張ります。よろしくお願ひします。

○関口委員 北海道新聞で編集委員をしています関口と言います。

大阪出身で、美術予備校の運営、信用金庫の職員をした後、30歳のときに北海道に移住してきました。

17年ぐらい前に東京で原子力を担当しまして、それ以来、ずっと原子力の取材を主にやっております。ご存じかと思いますが、今、核のごみ、高レベル放射性廃棄物の処分地を選ぶ作業が北海道の寿都町、神恵内村というところで行われていて、そのことや、あと、2011年の3.11以降は、毎月、福島に通っていて、福島第一原発の廃炉のことを見たりしています。

一方で、持続可能性みたいなことを取材の根底に置いていて、S D G s 、持続可能な開発目標という国連の目標ができる直前ぐらいからずっと取材していましたが、その関係で、S D G s の中にもジェンダー平等を実現しようという目標があるので、そういうことにも関心を持っておりました。

また、以前、こちらの菅原亜都子さんを取材したときに、ガラスの天井とべたつく床という表現をされていて、女性の活躍を阻むものと、そもそも床がべたついて立ち上がりないみたいな、その話がすごく印象に残っていました。ジェンダー関連の施策のプランみたいな記事も結構書いたりしていました、個人的にはどちらかというとべたつく床のほうに関心がありますが、ガラスの天井の部分とべたつく床の部分の両方について取材しようと思つてずっとやっています。

19歳の一人娘がいて、彼女とも、女性の活躍、あるいは活躍できないことなどをいろいろ話し合ったりするので、この場で役に立つことが言えるか、言えないかは分かりませんけれども、少しでも役に立てればと思いますので、よろしくお願ひします。

○田中委員 電通北海道の田中と申します。よろしくお願ひいたします。

私は、経営管理局総務人事部という部署において、ふだんは人事の仕事がメインで、

採用や若手育成、あとはダイバーシティー推進などをやっております。

会社としては、電通グループという広告、マーケティングを専門にしている会社で、北海道に分社化されていまして、社員数は150名ぐらいです。もともと、電通グループという会社は、結構、男性的な会社でございまして、ここ数年、いろいろな人材の向き合の方や、広告や表現などというところで社会に接していくうちに、男性的なままでは盲点が多く過ぎるということで、ダイバーシティーという広い言い方をしておりますけれども、例えば、男性育休を推進したり、LGBTQの方にも過ごしやすい会社を目指したり、いろいろな切り口で会社の改善を進めております。札幌のいろいろな会社さんとお取引をさせていただいている会社なので、いろいろな企業さんと一緒に解決できる課題は何かとか、企業側からできる社会の改善や社会をよくすることは何かということを日々考えているような立場になっております。

今日は、皆さんといろいろなお話ができますことを楽しみにしておりますので、よろしくお願ひいたします。

○波田地委員 NPO法人女性サポーターASY1の事務局長の波田地と言います。

この法人は、10年前にスタートして、今年でちょうど10周年になります。お母さんとお子さんだったり、単身の女性、また、DVに限らずいろいろな事情で家を失ってしまった方々のシェルターをやっている団体になりまして、さっきの関口委員のお話で言うと、日頃、べたつく床のほうにいらっしゃる方々に接することが多いかなというふうに感じています。

私も、いつも女性支援や女性が活躍しやすい社会、ジェンダーという話題でこの場にいさせていただいているのですが、ふだん、私たちの接している対象者はもちろん女性ですし、それは全ての女性を代表するものではないかもしれない、でも、女性の生きづらさを何重にも被った結果、今、私たちの目の前に現れている方々だなというふうに感じていて、そういう視点から何か意見を言えたらいいなというふうに感じています。

それから、隣に横山委員もいらっしゃいますが、今度、10周年記念として、「あまねく女性を支える地域を考える」というテーマでシンポジウムをしますので、こちらもご案内できたらいいなと思っております。今日はよろしくお願ひいたします。

○横山委員 初めまして。

札幌学院大学の横山と申します。

一度こちらで研修させていただいたときに、参加者の皆さん方が本当にすごく意欲を持って参加してくださっている様子を思い出しました。

私は、札幌学院大学人文学部人間科学科というところで、ソーシャルワーカーの養成に携わっています。京都出身で、ずっと京都、関西をうろうろしていましたので、しゃべっているときにちょっと関西弁が出るかもしれません。でも、こっちも長くなつてもう二十余年になりましたので、本当に気温、体温はもうどさんこで、夏は絶対に関西に帰れない、そんな体になっております。

多分、こちらからお声がかかったのは、波田地委員と少し似ているのですけれども、私はずっとシングルマザーの研究、あるいは実践に関わってきました。DV被害を受けてトラウマを抱え、精神的な不調を抱え、ちっちゃい子どもがいて、そして、裁判を抱え、仕事を行いと、そういう日常の中で母子生活支援施設を利用しながらどんなふうに生活を再構成していくか、お母さん面談を通しながらその辺をずっと研究してきました。

始めたときには、本当にかわいそうな不幸な女性みたいな感覚が私自身の中に少しあつたと思います。ただ、ずっと10年、15年と研究していく中で、今は、これはもう全く女性抑圧の構造的な問題だということに立場を置いて、ソーシャルワーク、支援、あるいは、社会の中でどうジェンダー・センシティブを定着させていけるかというところに関わっています。ですから、今、私は、ゼミでは、若者みんなのジェンダースタディーをつくりしていくということをやっています。

そんな中で、今日の協議会を主催してくださったさっぽろ青少年女性活動協会に就職が決まったゼミ生が1人いまして、ぜひ4月からはお世話になりたいと思っています。よろしくお願ひいたします。

○青田委員 皆様、お疲れさまでございます。

札幌市市民文化局男女共同参画課長の青田と申します。

昨年4月に着任いたしまして2年目となっておりますので、この協議会には昨年に引き続き参加させていただいております。初めての方も大勢いらっしゃいますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

私どもは、男女共同参画センターを所管している部署ということになりますので、この場で、簡単に我々男女共同参画課の取組についてご紹介させていただきたいと思います。

我々は大きく三つの分野を担当してございます。一つは、ワーク・ライフ・バランスや女性活躍、男性の家事・育児参画といったものの支援、もう一つは、性的マイノリティー、LGBT、また、人権全般に関する啓発といった取組を行っております。最後に、先ほどからいろいろお話を出ておりますが、DV被害や性暴力被害、そういういったものをはじめとする困難を抱える女性への支援、主にこの三つの分野の取組でございます。ただ、我々札幌市の職員だけでこの事業をするわけではなく、事業のほとんどは、指定管理業務ということで男女共同参画センターのほうで担っていただいております。

今回、本日の意見交換のテーマにもなっておりますが、この男女共同参画センターが法的に位置づけられたということで、この役割についても今後さらに重要になってくるのではないかと思っております。本日は、新しい皆様ですので、新しい視点でまたいろいろとご意見を頂戴できればいいかなと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○事務局（佐藤主任） 皆様、ありがとうございます。

<同席する職員の紹介>

札幌市男女共同参画センター

森口市民参画課長、山下管理担当係長、菅原事業担当係長
伊藤、岩崎、橋本

○事務局（佐藤主任） 続きまして、この会議の目的などについて、事務局より説明させていただきます。

お手元の札幌市男女共同参画センター運営協議会設置要綱をご覧ください。

まず、この協議会ですが、私ども指定管理者である公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会が行う札幌エルプラザ公共4施設並びに男女共同参画センターの事業運営に関する協議及び調整を行うために設置しております。

協議事項につきましては、第2条に書かれておりますので、ご覧ください。

また、組織につきまして、10人以内の委員で組織するものとして、今回は8人の委員の皆様にお願いしております。任期につきましては、2年以内で再任を妨げないという条項になっております。

また、協議会は、指定期間中、年2回以上の開催ということで、私ども指定管理者が招集することとしております。委員の皆様には、2年間の任期の中で、今回も含めて4回の運営協議会にご参加いただきます。

以降につきましては、お読みいただき、ご確認いただければと思います。

簡単な説明でしたが、ここまででご質問などはございますでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○事務局（佐藤主任） 運営協議会設置要綱第5条に基づき、委員の半数以上が出席しておりますことから、会議の開催が成立していることをご報告いたします。

この後の議事進行についてですが、札幌市男女共同参画センター運営協議会設置要綱第6条に基づき、指定管理者、または指定管理者が指名した者とすることとなっておりますことから、この後の進行も事務局で進めさせていただきたいと思います。

3. 議 事

○事務局（佐藤主任） それでは、令和7年度第1回運営協議会の議事に入らせていただきます。

本日は、令和6年度の施設の管理運営面におけるご報告と令和7年度の中間報告について、令和6年度に実施した事業のご報告並びに令和7年度の事業計画進捗報告についてご説明いたします。後半には、札幌市男女共同参画センターに期待する取組についてご意見を伺います。どうぞ、忌憚のないご発言をいただければと思います。

それでは、札幌エルプラザ公共4施設の令和6年度管理運営に関する報告と令和7年度の中間報告について、事務局の山下よりご報告いたします。よろしくお願ひいたします。

○事務局（山下係長） 改めまして、主に貸室事業及び施設の維持管理を担当しております山下と申します。よろしくお願ひいたします。

私からは、施設概要、利用人数など統計的な内容について、令和6年度の最終報告と令和7年度の目標及び現在までの進捗状況、そのほか、今年予定している事柄について、概要としまして5分程度でご説明申し上げます。駆け足になりますが、ご容赦願います。

札幌エルプラザは、公共棟、民間棟に分かれ、多様な団体が入居するビルで、1階から4階までの公共4施設には男女共同参画、消費生活、市民活動、環境保全の分野を担う四つの公共施設が入っております。また、その4分野の図書資料を取り扱い、分野をつなぐ役割を担う情報センターもございます。

資料3の左上をご覧ください。

公共施設は、平成15年にオープンし、今年で22年目となりました。ピーク時には年間およそ60万人の利用者数がありましたところ、社会的な変化を経て、利用の制限のあった時期もございますが、令和6年度には52万人程度まで利用者数が回復し、目標値を達成したところでございます。

今年度、令和7年度は、さらに約2万2,000人増加した54万2,000人を目標に掲げ、一人でも多くの方に当センターを知って利用していただけるように、既にご利用いただいている方へは愛着を持って活用していただけるように適切な案内を、これから利用していただく方には、まずは当センターの情報が手元に届くようなアプローチを検討し、積極的に取り組んでまいります。

続いて、札幌市男女共同参画センターについてでございます。

当センターは、320人程度が収容できるホール、90人程度収容の大研修室など、大規模な講演会や活動団体の総会等が開催可能な部屋のほか、婦人文化センター、女性センターの流れを受けて設置されている洋和裁室、和室や料理実習室のように目的を絞って貸し出す部屋を合わせて25室の貸室を所有しており、活動団体への場の提供として安価で継続的に活動場所を確保できるよう貸室事業を行っております。また、市民活動のうち、男女共同参画分野に登録している支援団体へは無料の活動支援室の貸出しも行っております。

先ほどの資料の裏面をご覧ください。

今回お示ししておりますのは、有料貸室利用率の推移を示す数値でございます。利便性の高い立地であることから、年間の利用率が80%を超える部屋も複数あり、公共的な施設の中では非常に高い利用率でございます。しかし、部屋の種類によってはまだまだご利用いただける余地のある状態ですので、広報活動にも力を入れてまいります。

資料にはありませんが、この数値を午前、午後、夜間の三つの貸室区分に分けて読み解いていくと、圧倒的に夜間の利用が少ない、回復していないという状況が続いております。

のことから、今年度から状況を改善するための手段の一つとして、札幌市のご担当者様にもお力添えをいただき、11月から半額で使用することができる新しい4種の割引制度を導入することになりました。ホールを利用して前日夜間区分に設営する際に適用する設営割引、1か月前から予約可能なイベント開催に向けた総練習を行う際に適用するリハ

ーサル割引、1週間前からフロアだけの使用に適用させる駆け込み割引のほか、当日、ホール以外の貸室を夜間帯に利用するときに適用する当日による割を取り入れて、新規利用者の獲得と施設の活性化を図ります。本割引制度の一般のお客様への告知は10月を予定しており、現在、ルールの整備や広報物などの準備を進めている段階でございます。

また、同じく、利用料金につきまして、今年度、利用料金の改定がございました。お配りしたエルプラザ公共4施設利用案内のパンフレットの中に2種類の料金表が挟まっていますが、今は時期により料金の異なるお部屋を窓口で案内している状態でございます。

11月には、全ての部屋が新料金に統一される動きになっております。

施設全体の維持管理としましては、札幌市が主導して行っている館内照明のLED化工事がございまして、現在、工事範囲の7割程度が終了した状況でございます。12月中の終了を目指し、利用を最優先にしながら工事の調整対応に当たっております。

館内のほとんどの照明がLEDに変わることにより、一般的に言う光熱水費が支出の中でも非常に大きな割合を占める施設ですので、恒常にかかっている費用の面でも、環境配慮の観点から見た省エネの面でも、大きくプラスの効果が出るものと思っております。安全を第一として、この後も適切に業務を進めてまいります。

最後に、22年が経過する施設ですので、計画的な設備の入替えや効果的な修繕などが必要になっており、今後も増加する見込みでございます。札幌市のご担当者様と情報を密にし、効果的に実施できるよう業務に当たってまいります。

簡単ではございますが、私からの報告は以上です。

○事務局（佐藤主任） それでは、ここまで管理運営面に関する報告について、ご質問などがありましたらお願ひいたします。

○稻葉委員 今、教えていただきました夜の利用が少ないという件につきまして、私の印象ですと、18時から22時という時間帯は、私個人としては、こういう公共施設を一番よく使う時間帯がありました。一方で、多分、習い事やご年配の方が来る時間帯として考えたら使わないのかなとか、お子様は参加しない時間帯だなと思ったりしています。

この夜が少ないと分析や仮説としてはいろいろなものがあると思いますが、若い方に認知されていないくて使われていないのではないかなど、何か皆様なりに感じている仮説等をお聞かせいただけますでしょうか。

○事務局（山下係長） 個人の分析の範囲を超えていないという前提にはなってしまいますが、ほかの施設から考えると、もともと、この立地の割には、夜間というのはほかの区分と比べて少し低めの傾向ではありました。数年前の社会変化があつて以降、その活動だけが戻ってこなかつたという状況です。昼間の高齢の方やサークル的な活動については戻ってきており、プラスになっているような状況はございますので、会社員が帰り道にやっていた活動や家に帰るまでの間に行っていた活動という部分が戻っていないのではないのかなというふうに見込んでおります。

ですので、割引については、学生さんの活動や、今まで届いていなかったところに情報

を届けたいと思って取り組んでおります。

○稻葉委員 ありがとうございます。

もう一つ、コロナ禍前の夜の活動、使用について、例えば研修事業などが多くかったものがオンライン化されたとか、そういう仮説は成り立ちそうなのでしょうか。

○事務局（山下係長） 一部、そのような仮説も成り立つと思います。ただ、ここは、サテライトというか、そういう形にしていただいているので、実際にそうかということについては確信が持てないところであります。

○事務局（佐藤主任） ほかにご質問などはございますでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○事務局（佐藤主任） 次に、令和6年度の事業報告と令和7年度の事業計画進捗報告について、事務局の菅原よりご説明いたします。よろしくお願ひいたします。

○事務局（菅原係長） 皆さんのお手元にお配りしております資料4が令和6年度の事業実施報告になっておりまして、資料5が令和7年度になっています。なので、令和7年度のほうは、計画と既に終わった事業の報告となっております。

こちらは、個別の事業について記載しておりますが、今日は初回ですので、全体的な男女共同参画センターの事業の組立てのところをお伝えできればと思っております。

今回、委員の皆さんには、何らかの事業で関わりを持っていただいている皆様にご依頼させていただきました。もしかすると、皆さん、今回お送りした資料の事業報告を見て、あのとき関わった事業が載っていないのではないかと思う方が多いのではないかと思います。

実は、私たちさっぽろ青少年女性活動協会の市民参画課が実施している事業というのは、大きく分けて指定管理事業と自主事業がございます。指定管理事業というのは、札幌市男女共同参画センターの事業として行っているものになっていまして、こちらは、札幌市の仕様があり、それに対して、私たちは、5年間の計画を立て、そして、より細かな年度計画を立てながら進めているものになります。一方で、自主事業というのは、指定管理事業とは別に、札幌市やほかの機関、団体から受託をしている事業、もしくは、私たちが自主的に申請などをしている助成事業など、そういったものになっています。この自主事業のほうでパイロット的にチャレンジングな取組をしたり、もしくは、札幌市内にとどまらない広域的な事業を行ったりする中で、いろいろなネットワークを広げたり新しいノウハウを得たりしてそれらを指定管理の事業に還元していく、そんな目的でこの自主事業を行っております。

皆様にはどちらにも関わっていただいている部分があるかと思いますけれども、今回のこの運営協議会では、この男女共同参画センター指定管理事業のほうを中心にご意見をいただきたいと思っております。

一方で、4階にある女性のためのコワーキングスペースですが、こちらは、もともとは自主事業としてやっていたものが、札幌市の計画事業になり、その後に指定管理の事業になったというものであります。そういった形で、私たちとしては、市民の方のニーズを酌

みながら、声を聞きながら、その中で男女共同参画センターが地域の拠点施設として必要なものは何なのだろうかと、そういった声を聞きながら事業計画を進めております。

私たちは、事業を計画するときに、こんなフレームワークを大切にしています。

一つ目が、ガラスの天井とべたつく床についてです。リーダーを増やすとか、意思決定過程に女性を増やしていくということは大変大切である一方で、やはり、女性ならではの困難を抱えた女性たちの支援、これのどちらかだけをやっていると、私たちは何かもやもやするのですね。ガラスの天井ばかりやっていると、何か、地域の女性たちの誰かのことを忘れているのではないかというような気持ちになります。コロナ禍のときに、本当に目の前の女性の支援をたくさんしてきたなと思いますが、そのときに、目の前の困難に対応することも必要な一方で、長期的に必要なことは何なのだろうか、何かが足りていないのではないかという思いもあって、そんな視点もとても大切にしておりました。なので、この両輪でやっていくことが必要ということと、この女性たちは、分断されているかもしれません、根っこにある問題は実はつながっているのではないかと、そんな視点も持ちながら事業を計画しております。

そして、女性のエンパワーメントとジェンダー主流化という軸でも考えていきます。女性がスキルを得る、もしくは、一人一人の女性が収入を上げていくというように、女性に直接介入していくような事業が必要な一方で、女性を取り巻く環境を変えていくことや、もしくは、今パワーを持っている企業、男性とか、経営者とか、そういう人たちが変わっていくために、そういった環境に働きかけるような事業というもの、この両輪が必要だなというふうに思っています。

具体的な事業は、皆さんのお手元の資料にあるとおりですが、幾つかご紹介したいと思います。

次のスライドをお願いします。

女性リーダー養成研修、これは、これから企業の女性管理職になっていくような方たちに全5回で様々なプログラムを受けていただくといったものになっています。これは、女性のエンパワーメント、ガラスの天井なのですけれども、1回目と5回目には必ず企業の上司の方や人事の方、経営者の方にも来ていただいています。これは、女性だけが学んで、女性だけが意識が変わっても、会社に戻ってみると自分の周りは何も変わっていないと愕然とするという声を聞くことがあります。なので、女性たちにエンパワー、力を取り戻していただきたいですし、周りの環境も一緒に変わってほしいということで企画をしております。

次のスライドをお願いします。

これは、自主事業としての受託事業のほうで、ノルウェーのジェンダー平等の活動をしているChisomさんという方に来ていただいたときに、指定管理の事業としてもダイバーシティーミーティングをやろうということで、札幌で活躍されている様々な分野のリーダーの方にプレゼンをしていただきました。このとき、岸本委員にも大学生という立場

でご発言をいただきましたので、このとき感じたことなども、ぜひ、後で教えていただきたいと思っています。

次のスライドをお願いします。

これは、学習アウトリーチ事業ということで、大通高校の授業を行ったものです。やはり、学校の探究学習や社会科の授業などで、ジェンダーのことを学びたい生徒さんたちがとても多いなというふうに思っています。なので、私たちが行って講義をすることもありますし、あとは、本当に探究学習のサポートというか、どんな問い合わせを立てるか、どんな課題が気になるか、そういうところを一緒に考えていくような取組も、今年、龍谷高校などで行っています。

最後は、これは、子育ての講座になっています。子育てをしている方たちに、ジェンダーの視点を持ってどのように子育てしていくかを学ぶ講座になっています。現状で子育ての負担を担うことの多い女性を想定して企画していたのですが、カップルで参加してくださる方もいたりしました。このように、ジェンダーが入り口ではなくて、子育てを入り口にしてどうやってジェンダーのことを知ってもらうか、そういう工夫もしているところです。

個別の事業については報告書などにもありますので、こちらのほうでもぜひご質問などをいただければと思います。

以上になります。

○事務局（佐藤主任） それでは、説明がありました事業報告、事業進捗状況について、ご質問などがありましたらお願いいたします。

岸本委員、先ほど菅原からお話をあったところで、何か感じたことなど、もしよろしければお願いいたします。

○岸本委員 ノルウェーでダイバーシティや女性のエンパワーメントなどをされている起業家の方がいらっしゃったときのイベントで、私も、理系の大学生で男性ばかりの環境で勉強している自分の体験を話すという形で参加させていただきました。

すごく印象に残っているのは、私が大学で言われた言葉などを話したのですが、私にとっては言われることが当たり前になってしまっていたような言葉だったけれども、話を聞いてくださった方々からすると、結構、衝撃的だ、そういう状況だということを周りに広めてほしいと言われて、そのことに自分はすごくびっくりしました。

あとは、私のいる学科が本当に男性ばかりなことがすごく課題だと話したときに、たまたま同じ北海道大学に通っている教育学部の方が参加していて、そのとき、彼女の視点から見ると、教育学部は男女半々でジェンダーが平等の環境だから、北海道大学はジェンダーの面でそんなに悪いわけではないという意見を出してくださったのです。つまり、分野によって違いがあるというか、例えば、看護学部は女性のほうが多いけれども、女性がたくさんいるから女性のエンパワーメントの面でいいねという話ではないと、そういうことが、男性だけではなくて、女性の中でもあまり理解されていないのだなとすごく思わされ

たことが印象的です。

以上です。

○事務局（菅原係長） 子ども、若者のためのエンパワーメント事業もあるのですね。それで、若い方に足を運んでいただきたいという思いがある一方で、やはり、そこをごちゃ混ぜにしてと。このときは、会社員としていろいろな課題感を持っている女性や社長もいて、あとはN P Oの代表もいたり、その中で学生の活動をしている岸本委員がお話しするとか、何かごちゃ混ぜの場をつくりたいという思いもありました。

○事務局（佐藤主任） ほかにご質問などはございますでしょうか。

○稻葉委員 いっぱいしゃべってしまう感じで申し訳ございませんが、質問が出たほうがいいかなと思いまして、また質問させてください。

菅原係長に出していただいたガラスの天井とべたつく床、エンパワーメントとジェンダー主流化というところでいろいろと見ることができるかなと思っているのですけれども、このうち、三つ質問したいことがあります。

横軸のエンパワーメントとジェンダー主流化というのは女性にフォーカスしたところと汎用化していくところかなと思うのですが、特にジェンダー主流化のところで、ジェンダー掛ける何か、Xというところで様々な社会課題がある。例えば、私も関わっているフェアトレードも非常にジェンダーに関わりが多いとか、消費もそういったところが多いとか、もしかしたら、田中委員の会社がやっていらっしゃるメディアでの表象、見えるものとジェンダーなど、そういったところはすごく話題になっているかと思うのです。そういう中で、今までの取組、もしくはこれからの中でも、ジェンダー掛けるXについて、どういったものがXとしてあったのかということも知りたいというのが一つです。

もう一つは、ガラスの天井側ではリーダーのほうをやられていますが、集まってくる企業はどういったところがあるのかを知りたいのです。これは、多分、そんなに絞っていらっしゃらないのでいろいろあると思いますけれども、大企業の部長や経営者になりそうな人、起業してちょっとしたリーダーシップを身につけてもらいたいという方たちなどがいて、講師の方を見ると、私も浜田さん、長尾さん、小安さんは知り合いですが、結構いろいろな方に対応できる講師陣をそろえていらっしゃっていいなと思うのです。

そこで、どういう企業変革をしたいと思ってこれを続けてやっていらっしゃるのか、そちら辺の狙い、ガラスの天井のどの辺を狙おうとしているのか、もしくは、まだ手が届いていない経営者や、場合によっては制度づくりをする議員など、そういったところで、ここに手が届いていないと感じるものがもしあれば、そこを教えていただきたいと思います。

最後に、べたつく床についてです。これは、波田地委員といった専門家がいらっしゃる中ですけれども、やはりアウトリーチみたいなものも大事になってくると思うのです。しっかり読み込んでいない部分はありますが、どういったところがべたつく床の課題なのか、様々な課題があり、いろいろな対象者がいると思いますけれども、どういったところに対してこの事業をやったのか、そこも簡単に教えていただきたいと思います。

以上、三つですけれども、お願ひいたします。

○事務局（菅原係長） まず、一つ目の「ジェンダー×〇〇」というところですけれども、いろいろなところでお話しするのは、やはり、ジェンダー問題というのはクロスカッティング・イシューなので、いろいろな分野の中にジェンダー問題がある、5番目のゴールにジェンダーがあるのではなく、17のゴールに横串をさす形で、全ての問題をジェンダーの視点で見ましょうという話をよくしているので、「×〇〇」というのはすごく大切な視点だと思いました。

令和6年度の事業においても、広告から見るジェンダー課題やルッキズムの影響とか、こういった事業をしたこともあります。また、今、コワーキングスペースや自主事業のほうでも起業支援をすごくしているのですが、これも、始まったときは女性の柔軟な働き方というようなことが言われ始めていて、やはり掛ける起業だという思いで始めたなというふうに思っています。しかし、起業する方たちはやはり男性が多かったり、スタートアップのイベントに行くと男性ばかりで、そこで女性が嫌な思いをしてしまうみたいな声があった中で、女性の視点が足りていないとか、女性が安全に参画できない分野にジェンダーを掛け算して事業化していくということは今までやってきたところかなと思いました。

二つ目ですが、2024年の企業向けセミナーのパンフレットをお配りしていますが、開いた左側の下に昨年度の参加企業を書いております。実際に参加されたのはこういった企業です。これはもう7年か8年ぐらいやっている事業なのですが、以前は、平日の夜や土・日に単発でこういう事業をやっていたのです。そうしたら、毎回来るリピーターの女性たちがいて、自分のスキルを高めたいとかキャリアを考えたいとすごく熱心な女性たちが来ていたのですね。それで、その方たちは会社でもすごく活躍しているのかなと思って話を聞くと、いえいえ、私はもうママ向けのキャリアコースです、私がこんなに勉強しているなんて職場の上司は知らないのですという声がすごく多かったです。そこで、それだったら会社の名前を背負って昼の時間に来てほしいと、そういったことでプログラム化して始めたということがそもそもものきっかけでした。

最初は、七、八年前なので、これまでに研修などを受ける機会がなかった女性たちが受けていました。だから、最初の1回目はみんなすごく怒っていて、今さらこんなところに私を行かせてみたいな怒った気持ちで参加していたのですね。だから、会社への怒りもたくさん出てきました。

でも、5回連続で受けていく中で、ほかの企業の方たちと交流して自分の思いを話したりする中で、だんだんと、自分も変わっていきたいとか、来年は私の後輩を受けさせたいという感じで、チームで学んでいく中で変わっていくという姿勢がすごく見られたと思います。

年々、年齢が若返っています。リピーターの企業さんが多いので、次の世代、次の世代というふうに出してくださいっているのです。そうすると、若い方たちはすごく貪欲に、研修に行きたいです、どうせ時間を使って研修に行くのだったら学びたいですなど、そういう

うタイプの方たちがすごく増えてきて、とてもいいことだなというふうに思っています。

それから、何年か前に役員向けのものをやったことがあるのですけれども、全然、人が集まらなくて、リーダー研修に出してくださっている企業さんに役員向けの研修をやりたいのですと言ったら、うちはまだそこまでじゃないからなんていうという声があつて、参加者集めにすごく苦労しながら1回だけ開催したことを覚えています。ただ、そこから少し時代も変わって、また、企業さんたちのニーズなども変わっていると思うので、考えていきたいなと思います。

あと、議員さん、政治関係の事業は、実は令和6年度は結構多くて、例えば、学習会「次選挙が来たらどうする?」というのは、立候補する女性議員の話というより、すごくハーフの低いところで、どうやって選挙や政治をジェンダーの視点で見詰めるかといったものになります。また、団体との協力事業ですけれども、政治におけるジェンダーを考える学習会、道内の女性議員の方たちが参加する学習会、「シーターキノ『〇月〇日、区長になる女。』」というものも女性議員を題材にした映画、上映に合わせたトークイベントなど、女性議員といったところはまだまだ課題もありますので、これからもやっていくべき事業かなと思っています。

最後のアウトリーチですが、さっき自主事業のほうでお知らせしたL i NKというのは、札幌市子ども未来局の事業ですけれども、こちらでは、S N Sのパトロールをやったり、月に1回、薄野のほうに声をかけに行ったりしています。そこから相談があつて、そしてセンターの相談事業を使っている方もいます。あと、A s y 1さんや市内のいろいろな女性支援団体など、ほかにも力強い団体がたくさんありますので、そういったところとつながる中で、お互いに、相談はこっちで聞いたけれども、どうしても宿泊の場所がないのです、A s y 1さん、今どういう状況ですかとか、力を借りながらやっています。

やはり、アウトリーチというところで、こういった公的なサービスを届けるためには私たちだけではなかなか厳しく難しいところがあるので、いろいろな団体さんと連携しながらもっともっと外に出ていきたいと思っています。

何か、答えられているかどうか分からぬのですが、ありがとうございました。

○稻葉委員 いろいろ聞いたことに的確に答えていただいて、ありがとうございました。

もう一つ、先ほどのA s y 1さんも含めて、中間支援事業を行う団体への支援というのはこういったところですごく大事だと思うのですが、それは、最後の団体への支援という区分のところで行っているものがそれに当たっているということですか。

○事務局（佐藤主任） 波田地委員、帰る前に発言をしてほしいと思っているので、この後、声をかけると思います。

最後の事業区分：カというところに交流創出・ネットワーク支援事業とありますし、その中で、団体への支援と、団体とのネットワーク構築・強化という事業を行っています。こここの2階には市民活動サポートセンターもありますので、そこで基本的なN P Oの中間支援をやっていますし、既にお伝えしましたが、力強いN P Oたくさんあるので、そこと

はネットワークを組ませていただき一緒に活動するというところがあります。一方で、これからジェンダーの活動を始めたいのです、サークル活動を始めましたというところへの情報提供、また、自分たちで何か事業やイベントをやりたいので広報などを手伝ってほしいなど、そういう場合に協力事業という形を取って支援をしているという状況があります。

○事務局（佐藤主任） 今、稻葉委員からお話がありまして、べたつく床についての質疑をいただきおりましたが、実際に支援の現場で実践を重ねていらっしゃる波田地委員のほうからご意見、ご発言をいただければと思っているのですが、いかがでしょうか。

○波田地委員 アウトリーチの部分で私たちもセンターさんと一緒にやらせていただきたいまして、具体的には、昨年は、月に1回、炊き出し相談会のような形で、やはり、生活に困っている方々を対象にしているので、物資配付や食料もあるというところに相談支援をくつつけた相談会をやっていました。

そこにいらっしゃる方は、私がシェルターの仕事をしていて出会う方と同じ方もいらっしゃる一方で、私としてすごく発見だったのは、共働きの方も多くて、夫も働いている、自分も働いている、子どもは3人いる、物価上昇で非常に苦しい、貯金はない、自転車操業的になっているという層の方が多いことでした。私たちのシェルターだと、本当に最後のセーフティーネットの底を突き抜けた方がいらっしゃるので、福祉制度につなげたりとか、そのあたりがメインになってくるのですが、福祉の対象にもならない、ぎりぎりで踏ん張っている方たちです。共働き世帯以外だと、例えば、シングルマザーでお子さんが4人いるお母さん、自分は看護師で頑張って身を粉にして働けば何とか家計は回っている、しかし、自分の時間が一切なく、24時間365日、常に家庭と仕事のために動き続けていて、もうへとへとですという方とか、そのお母さんが病気になって倒れたら家庭自体が全て沈んでしまうのではないかというような、そういうぎりぎりの方々とお会いする機会があって、すごく痛しかゆなのですよ。お話を聞くことはできますが、具体的に何かを提案できたり、直接的にその方々の生活がよくなる手法は、実はあまり提案できることができなかったりして、そこがすごく、いらっしゃる方々は、皆さん、こうやって話を聞いてもらえるだけでもいいのですとおっしゃるのですけれども、本当に、何かもっとできたらなと思いながらも、届かないなというふうに感じたりしていました。

昨年は、65人くらいの方がいらっしゃっていて、皆さん、非常に苦しい状況の方が多いのだなと感じていました。アウトリーチの部分についてはそんな形でもいいでしょうか。

それから、一点だけ、先ほど菅原係長が報告してくださった内容ですが、稻葉委員がおっしゃったように、私も「ジェンダー×〇〇」はすごく大事だなと思っています。例えば、ジェンダーのイベントをやっても、もう既に意識が高い女性が多かったりしているので、集まって話をするよりも、それがまだ届いていないところ、特に大きな企業の経営者層などですね。生活困窮のことをやっていると経済、労働分野における女性の地位の低さがここにつながっているなと感じていて、私はやはりそこが根本だなと思っているので、そこ

に届く企画があったらすごくいいなと思っています。ですから、実際に企業向けセミナーの報告書を拝見して、本当にガラスの天井に向けて今突き破ろうと頑張っている方々が集まって、その中で連帯感が生まれていく、そういうこと自体もすごく意味があることだったのだろうなと思いました。

あとは、例えば、北海道というのは、官公庁の中でもジェンダーギャップ指数が全国の都道府県で最下位ですよね。特に、官公庁における管理職の割合が非常に少ないことが特徴というふうに見てていたので、民間企業の方向けもそうですが、私は官公庁がどんどん変わっていてほしいという思いもありますので、何かそこに向けた企画があったらすごくいいなというふうに思いました。

ざくくばらんですみませんが、以上です。

○事務局（菅原係長） アウトリーチのお話ありがとうございます。確かに、共働きや、今まで夫が十分に稼いでいたのだけれども、いろいろ変化があってという方たちへの対応というのは、私たちもすごく悩んでいるところだなと思ってお聞きしました。

また、特に官公庁向けといったところでは、今までそこに絞ってやったことがないなと思っていた。令和7年度調査研究事業では、男女共同参画統計に関する研修会というものを10月29日に実施予定なのです。これは、女性版骨太の方針も書かれていますが、私たち男女共同参画センターの職員がジェンダー統計を見ると、やはり、データからきちんとジェンダーギャップを見る化するとか、そういうスキルが私たちにはすごく必要だと感じているところでした。

最近、地方のジェンダーのお話をするときに、人口データや出生率、転出率、地方から女性が消えていっているのだというような話があって、時々、何か脅しつぽく聞こえるときもあるのですが、そういうデータをきちんと見せていくことが大事だなと思います。さつきもおっしゃっていただきましたが、やはり、企業の経営者の人たちが行動を変えるように説得するにはそのデータを伝えることがすごく必要なので、男女共同参画統計に関する研修会ということをやる予定になっています。

また、これは、ニッセイ基礎研究所というところでジェンダーの統計をやっている方に来ていただくのですが、その方から、全国から呼ばれているのに北海道は初めてだとすごく喜んでくださっていて、ぜひほかの自治体の方にもご参加いただいたらどうですかと言っています。そこで、札幌市さんにも相談して、道庁さんにも情報提供をお願いしながら、私たちだけではなく、一緒に学ぶ機会をつくっていく予定になっております。

それから、北海道開発局からは、毎年、研修の依頼をいただいている。その中では、最初は女性活躍だったものが、だんだんと男性育休になり、今年は年代のギャップについてやってほしいと言われて、そこからどうジェンダーに持っていくかなど悩んでいるところです。

皆さんにもし官公庁向けのアイデアがあったら、ぜひアドバイスをいただければと思います。

ありがとうございます。

○岸本委員 時間を長引かせてしまうようで申し訳ないですが、少し気になったのは、こういうイベントなど、名前にジェンダーや男女平等、女性の活躍推進という言葉が入っているものがすごく多いと思うのです。しかし、大学生の視点からすると、名前にジェンダーと入った瞬間にアウトというか、行かないというか、自分には関係ないものだと感じて結構はねてしまうかなというように感じるのですが、大学生や高校生が自分からこういうイベントに来ているのは実際にどれくらいいるのか、教えていただければと思います。

○事務局（菅原係長） 例えさ、さっきも少しご紹介した子育ての学習会はタイトルにジェンダーと入れなかつたのです。これは、岸本委員がおっしゃつていただいたように、まさに戦略的に入れなかつたという経緯があります。また、企業向けでは、ジェンダーではなくダイバーシティーと入れるとか、そこは、本当はすごく出したいのだけれども、出さないようにして幅広い方に来ていただくようにすごく心がけています。

一方で、若い方たち、大学生などの参加は、実はすごく苦労しています。例えさ、令和6年度「『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた』を読む」という読書会は、このタイトルで来てくださつた人たちなので、学生さんだけではなく社会人もいましたが、やはり、ジェンダーのことすごく関心がある方たちではありました。けれども、参加者数は6人となつていて、ここはなかなか難しいところだなと思っています。

なので、ジェンダーという名前を出さないで幅広く来てもらって、そこで何か感じてもらう、気づいてもらうという事業と、本当にジェンダーのことを学びたい、周りにジェンダーのことを話せる仲間がいないから、そういう人同士で集まつて話したいといったときでは、やはり、出し方を変える必要があるなというふうに思つています。

すみません、具体的に大学生が何人ぐらい来ているかお伝えできないのですが、橋本主任、大学生の参加状況などについて何か言えますか。

○事務局（橋本主任） その枠だと、大学生だけに限らず、高校生の方も対象にしている事業が結構多いのですが、印象的なものになつてしまつますが、逆に、岸本委員のお話のつながりで、軟らかくて俗受けしそうなのは、どれが一番そういうものだつたのか。単純にミーハーな感じ、受けを狙う感じのイベントなど、そういうものがあつたりしましたか。

○事務局（菅原係長） ミーハーということですが、ジェンダー分野でミーハーなものは、例えさ、瀧波ユカリさんのトークイベントは楽しい雰囲気の中で幅広い方々が気軽に参加

されたものなのですが。ただ、今、稻葉委員がおっしゃっていたのは、あまりジェンダー感がなく、楽しいよというようなイベントということですね。

○稻葉委員 例えば、資料4の町田さんのところは、もっと明るく、平たく、アイドルっぽくというか、いろいろ打ち出し方はあったりするなと思ったりしたのです。別に、だからどうということではなくて、今後の検討のところで、何か軟らかいものも、少し俗っぽい受け狙いみたいなものもあえて試してみてもいいのかなと思いました。

○事務局（菅原係長） 考えていきたいと思います。

○事務局（佐藤主任） ありがとうございます。

この後の意見交換の中でも気になる点に触れていただければと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

4. 意見交換

○事務局（佐藤主任） 続きまして、意見交換に入らせていただきます。

ここからは、事業主任の橋本が進行いたします。

○事務局（橋本主任） それでは、ここから意見交換に入ってまいります。

意見交換の進行を務めます公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会の橋本です。よろしくお願ひいたします。

本日の意見交換のテーマは、札幌市男女共同参画センターが今後強化すべき分野や機能についてとなっております。

まず、こちらのテーマを設定した経緯からご説明させていただきます。

令和7年6月20日に、独立行政法人男女共同参画機構を新設する法律が成立いたしました。これによって、男女共同参画センターは、地域におけるジェンダー平等を進める中核拠点としての役割がこれまで以上に明確となりました。

本日お配りしている資料6の表は、国の女性活躍・男女共同参画の重点方針と札幌市の第5次男女共同参画さっぽろプランを基に、センターの事業を分野ごとに整理したものになっております。

こちらを見ていただくと、大きく五つに分けられております。

一つ目の女性に選ばれ、女性が活躍できる地域づくりというところでは、多様性を尊重し、あらゆる分野で男女共同参画の視点を反映するために、幅広い市民に向けた学習機会の提供や学校への出張講座、企業支援などのセミナー等を行っております。

二つ目の全ての人が希望に応じて働くことができる環境づくりに関しましては、専門団体等と連携いたしまして、女性の就業継続につながるセミナーを実施したり、今年度は、特に主催の事業の中での託児サポートも強化しているところでございます。

三つ目のあらゆる分野の意思決定層における女性の参画拡大は、企業向けの女性リーダーの養成研修や政治分野への女性参画に関する学習会、女子学生向けのワークショップ等を行っているものになります。

四つ目の個人の尊厳が守られ、安心・安全が確保される社会の実現は、相談事業や困難を抱えている女性への支援というところを、札幌市にある多様な団体の方と連携して行っているものになっております。

最後に、五つ目の女性活躍・男女共同参画の取組の一層の加速化に関しましては、さっぽろプランに独立した項目があるわけではありませんが、各分野の達成を加速させる活動としまして、統計に関する学習会や国際的な動向を踏まえた事業を実施しているものになっております。

今日、冒頭でも少しお話がありましたけれども、ジェンダーへの関心が高まる一方で、関心や理解の度合いに差があり、立場によって捉え方が違い、分断が生じてしまう場面があったり、また、先ほども委員の方からのお話がありましたように、関心の高い方、積極的に参加していただく方もたくさんいらっしゃいますけれども、その前段階にいる方々や社会を変える力を持つ方々に対してどのように情報を届けていくか、そういったところも課題に感じているところの一つになっております。

本日は、こちらの表を参考にしていただきまして、札幌市男女共同参画センターがこれから特に力を入れる分野や、新たな工夫が必要な取組について、皆様それぞれのお立場からご意見をいただければと思っております。皆様からそれでお話をいただきますけれども、ほかの委員の方のご発言を聞いて、これはというものがありましたら、ぜひ、委員の方同士でもご質問やコメント等を交わしていただきながら活発な意見交換にしていければなと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

説明が長くなってしましましたが、こちらの表をご覧いただきながら、札幌市男女共同参画センターが今後強化すべき分野や機能というところ、皆様が期待されるところについてお話をいただければと思っておりますけれども、いかがでしょうか。

それでは、横山委員、先ほど札幌市男女共同参画センターの役割が明確化されたということをお伝えさせていただきましたが、横山委員はジェンダーについて研究されているかなと思うのですけれども、大枠として男女センターの役割の変化というようなところで期待される部分などがございましたらお伺いできればと思います。

○横山委員 今、資料を拝見して、読むのに必死で十分に考えているわけではありませんが、私の立場からすると、やはり、4番の個人の尊厳が守られ、安心・安全が確保される社会の実現に向けてというところで、どのようなことがということが一番の専門的な関心になります。

細かいところは今のご説明にないので、ここではざっくりとした内容を把握するのにとどまりますが、僅かな経験からすると、一番大事なことは、多分、関係機関のネットワークで、そのネットワークの中で何をつくっていくか、本当に地味なのだけれども、つくり上げていくということ、そして、そこから広げていく活動、ソーシャルアクションにつなげていくような、そういう活動の支援がとても大事だろうと思いますし、こちらの役割として大きいところではないかなと思っています。そこは、行って、いろいろな活動をされ

ているというふうにもお聞きしていますので、現状の課題としてどんなことがあるのか、お聞きしたいと思います。

もう一点は、全体を通してですが、こういう活動をこうしたプランや計画に基づいてやっていて、とても興味深く、そしてまた、そこにいろいろな思いを込めてやっていらっしゃるということがすごく見えてきました。ただ、その結果の評価をどういうふうにしていくのだろうかという評価の視点、指標ですね。それはとっても難しいことだと思うのですが、それを、これまでどういうふうにされてきて、でも、評価に関してはきっといろいろな課題があるだろう、それはどういうものだろうかと、質問になってしまいますけれども、2点お願いしたいと思います。

○事務局（菅原係長） 一つ目がネットワークの課題ということですね。

やはり、女性支援のところのネットワークは、本当に皆さんのご協力によってすごくうまくいっているというふうに思っています。先ほどA s y 1さんもお話ししてくださいましたが、コロナ禍のときにC l o u d yというネットワークをつくりまして、その勉強会で横山委員にも講師として来ていただいたという経緯がありましたので、一緒に活動もし、一緒に学びもし、そして、一緒にケースも共有するといったところまで、コロナ以降、そこの協働というのは本当にすごく進んでいったなというふうに思います。

一方で、やはり、私たちの苦手な分野を考えると、今、国がすごく進めようとしているテクノロジーやビジネス分野というのは、きっと全国の男女共同参画センターでも苦手なところが多いだろうなと思います。私たちも、テクノロジー分野ということでは、例えば、先ほど岸本委員のお話に出ていたW a f f 1 eさんと共に催で事業をやったこともありますたけれども、声をかけていただくことはあっても、私たちのほうからそういった企業さんとネットワークをつくっていきましょうとか、テクノロジー分野における北海道の女性たちの課題はここなのです、なので、これを解決するためにこういうネットワークをつくって、こんなふうにアクションを起こしていきたいというところになると、私たちはなかなかそうした分析ができておりません。

ですから、ネットワークづくりができるていないところとしてテクノロジー分野やビジネス分野があつて、それは、そもそも苦手な分野で、課題が明確ではなかったり、課題解決のために必要なパートナーシップというものがイメージできていないのだなど、今、話しながらすごく明確になりました。

もう一つは、ほかの男女センターでは結構やっていても、札幌では結構弱いところということでは、地域というのがあるかなと思っています。町内会など、センターに来られる方はどうしても札幌市全域から来られるので、同じような課題を持ったネットワークはつくれても、地域ネットワーク、地縁で結ばれるようなネットワークというのは、そこもすごくジェンダーの課題があるはずなのに、地域に入っていってといったところはなかなか課題かなと思います。

ただ、防災というキーワードでジェンダーのことを学ぶようなときがありますが、そ

といったときは地域ということが出てくるのですね。なので、いきなり地域に入っていくよりも、例えば防災だったり子育てだったり、もう一つテーマを立てて地域に入っていく、きっとそういうことをもう少ししていく必要があるのかなと考えています。

二つ目の評価のところですが、今、助成事業などにおいては、ロジックモデルをつくって、そこで指標を立てて、それがきちんと達成されたのかどうかとか、やはりすごく厳しく問われます。そういういたところでも私たちのスキルを上げていかなければいけないと思います。

もう一つ、指定管理業務の中でやっていることですが、今まででは、どうしてもアウトプットの評価といったところで、参加人数がどうだったか、直後の感想がどうだったかというところが評価の中心なっていました。それももちろん大切なのですが、実は、今年から、その後に行動変容があったのかどうかということについてちゃんとアンケート調査しようということになっていまして、4月から7月の事業に参加した方たちに対して9月にアンケートを取ることを考えています。それも初めての試みなので、全然変化はなかったとなつたらどうしようかと不安に思いながらこれからやろうとしているところですが、そういう結果も次回の協議会で皆さんにご相談できるかと思いますので、よりよい事業にしていくための評価といったところで、ぜひ、皆さんにもいろいろとアドバイスをいただければと思います。

○事務局（橋本主任） 横山委員のお話からも、中間支援というところの必要性や、もっと力を入れていくべき部分というところも考えなければいけないと感じました。

○関口委員 前段にアウトリーチという言葉が出ていて、菅原係長からも地域や町内会という話がありましたけれども、そのことで、たまたま8月4日に、元TBSのアナウンサーとは知らなかつたのですが、姫路市の教育長である久保田智子さんにインタビューをしたときに思ったことがあります。そのとき、学校が大事だ、特に小・中学校は義務教育だから大事なのだという話をしていたのですが、それは、教育としてその時期が大事なのかという話かと思ったら、そうではなくて、彼女が言いたかったのは、そこには相手がいるのだということでした。つまり、100%ではないけれども、例えば、貧困な家庭とかDVで避難されている家庭の子どもも小学校には大体みんないる、だから、アウトリーチということでいけば、そこで説明会をするとか、何かの募集をするとか、町内会などではなかなかみんなは来ないけれども、義務教育の小学校だとほぼ來るので、そこに働きかけていくことが極めて大事だとおっしゃっていて、なるほどなと思ったのです。ですから、先ほどの事業実施を見ると、高校や大学では意外といろいろやっているけれども、小学校にももっともっと行っていただけたらいいなとすごく思ったので、今言っておこうと思いました。

それから、今、新聞なども部数がどんどん減っていますから、本当は、ジェンダーのことを書いたり、エネルギーのことを書いたり、あるいは、生活保護を受けるのは権利ですと書いたりしても、実際に聞いてもらいたい方のところにはほとんど届いていないという

じれったさ、もどかしさがあります。そういうところは、多分、センターさんのほうでもやっぱりあると思うので、どうやってそこをアウトリーチしていくかということを大事にしていただきたい、考えてほしいことがあります。

ついでに、自分でもアウトリーチという言葉を使いましたが、資料には片仮名がすごく多いということが気になって、アントレプレナーとかやスタートアップとか、読み手はどうなのだろうなと。経産省も使っているので仕方がないのですが、たまたま、先々週、国連広報センターの女性にインタビューしたら、SDGsについて、せめて日本国内ではSDGで止めておけばよかったと言うのですね。最後にsの小文字がついていて、ほとんどの人が読めない、特に年配の方は読めない、それで嫌になって、もうSDGsの議論に入つてこないということが本当にあるらしいのですよ。例えば、女性アントレプレナーのための地域密着何とかイベントといったきに、そこに参加しようとするハードルがまず出てきてしまう、その言葉自体で、その片仮名を読めるか、読めないかという不安、その意味が分かっているかどうかという不安もあって、そこで壁をつくってしまうみたいなところがあります。ですから、なるべくならもう少し分かりやすい言葉でというか、例えば、最後の情報コンシェルジュ事業も情報相談事業でもいいかなと思うし、何か考えていきたいと思います。

ついでに言うと、今日のこの席の並びですが、どこを向いてしゃべつたらいいのかよく分からなくて、後ろからいろいろ聞かされるとちょっとつらいなという思いがあるということを意見として言っておきます。

○事務局（橋本主任） 今の名称のつけ方は、岸本委員からも少し事業名の話が出ていましたが、対象にしている方にちゃんと届く名称になっているのかなど、そういったところも考えていきたいと思います。

○青田委員 今のお話に関連して、事業は我々のプランに基づいてやっていただいているので、事業についてどうのこうのということはないのですけれども、昨年からセンターの方と一緒にいろいろなお仕事していく中で私も気になっていたのは、やはり広報の部分です。チラシ一つにしても、今言っている言葉一つにしても、それを見て、これは誰を対象にしているのか、どんな事業なのだろうかと、ぱっと見て分からないものが結構あるなと思っていて、関わっている私が分からないものは、これから関わりたいという人には届かないのではないかと、時々、気になるところがありました。やはり、そういったイベント一つにしても、誰に届けたいものなのか、そのためにどういう表現をしてチラシなりで広報するのか、そういうことをもうちょっと考えていったほうがいいのではないかと思っていたところです。

また、事業をした後の報告の広報というところも大事なのではないかと思います。こういうイベントをやって、どういう成果があったのかどうかというところもありますけれども、やりっ放しではなく、こういったことがあってとてもよかったですということでもいいですし、こういった課題があるということでもいいので、やった結果はこうだったということ

のも教えてあげたほうが、きっと、今後これに参加したいと思う人たちにもそういったものが届くのではないかと。

この1年ちょっと、関わっていて思ったところなので、言わせていただきました。

○岸本委員 先ほど関口委員がおっしゃっていたこととよく似ているのですが、イベントをするには高校や大学よりも小・中学校にアプローチしていくことがよいとおっしゃってくれていたと思います。私もすごくそう思っていて、大学生の同期の女の子や男の子に話していると、考え方方が結構出来上がっている感じがすごくして、大きく変わることはもうなさそうと感じることが多いのです。例えば、他者を、男性とか女性といった立場の枠組みではなくて、その人自身として見るような考え方、相手へのリスペクトや自分自身のエンパワーメントなど、そういう考え方を身につけることができるの、私は小・中学校までかなと思っているので、よいという根拠は違いますけれども、私も小・中学校にアプローチしていくことがすごくいいと思います。

それから、片仮名が多過ぎるということで、すごく分かるというか、確かにそうだとは思います。ただ、否定しているみたいな感じにならないといいなと思うのですが、私は、逆に、漢字が並んでいると一歩引いてしまう感じが結構あります。さっきおっしゃられていたと思いますが、私以下の年齢だったら、もしかしたら片仮名のほうが受け入れやすいのかもしれないとか、もうちょっと年配の方を目標としているのだったら漢字や日本語を増やすとか、こういう人たちに来てほしいと思っているのだったらこういうふうにするというように、明確に決めたほうが届けたい人たちに届くかなと思いました。

○事務局（橋本主任） ターゲット、対象を明確にというご意見を頂いたかと思います。

○関口委員 片仮名のことは、確かに岸本委員のおっしゃるとおりだと思います。だから、片仮名で書きつつ、そのチラシの下にどういうことかと書くようにすればいいかなと。私の意見は私のような年配者の感覚ですが、若い方は片仮名がいいかもしれないですね。

○事務局（橋本主任） 対象にしたい方、どういう方に届けたいかというところで、名称等も考えていく必要があると思っております。

○稻葉委員 自分の話したいことの前に、今の岸本委員と関口委員のお話を受けてですが、重箱の隅をつつくようですけれども、確かにルビも振られていないと思いましたし、そういったところでもしかしたらユニバーサルさをもっとたくさん増やすことができるのかもしれない、面白い議論だと思いました。片仮名をたくさん使うとか、あえて英語などを入れることで、そちらの対象層が増えるかもしれませんし、逆に、易しい日本語をきちんと使っていくことでご年配の方がもっと来やすくするなど、そのメッセージ性のところでうまい言葉の使い方、出し方というのが必要だと思います。青田委員がおっしゃったように、誰に向けてということを分かりやすくグラデーションしながらやっていって、同じような内容だけど、こちらはやたら片仮名ばかり、そちらは全然違って日本語や平仮名が多いなというものがあるとすごく面白い反応が出るかもしれないなと、お聞きしていて思いました。

私の意見というか、ざっと見たところで、最初の質問にもひもづいてくるのですが、お願いというか、こういうことを頑張ってほしいと思ったことが四つぐらいございました。

一つがガラスの天井というところですが、やはり、札幌ですので何といっても北海道の中では企業数が多いですし、参加している企業さんは、電通北海道さんも含めて、こちらに本社があるような会社、あるいは、支社を置いている会社もすごく多いと思います。なので、企業向けのところでは、もっと突き抜けて、分かりやすく、女性活躍推進、管理職層をどうしていくのか、その中でどうマネジメントしていくのか、経営陣にどう上げていくか、そういうところでの企業側へのアプローチというのはもっともっとあっていいかなと思います。リーダーシップというふうなものよりも、例えば、大企業で部門長をやっていらっしゃる現役の女性の方からそういうノウハウを聞くとか、人事制度をどういうふうにしていくのかとか、評価のバイアスについてとか、細かいテーマがたくさんあると思うのです。あれもやってください、これもやってくださいという感じになるのですが、企業向けにフォーカスしたものがもっとたくさんあれば札幌らしいなと思います。そして、札幌に支社を持っているのだったら、もう、全部来てください、東京本社にアプローチしてくださいとか、そういうこともできるのではないかと思いました。

もう一つ、ジェンダー主流化の図の左側にあったと思いますが、先ほどの掛ける何とかというところは、もっとたくさんやっていかれるのがいいのかなと思います。そのとき、利用者数という指標もありますが、来てもらうのではなくて、やはり出ていくと。物理的に難しくて大変なところも踏まえながら、今、出していく先として小学校という話もありましたが、例えば、類似するフェアトレードや、もしかしたらテクノロジーでも、そういうところで社会性を持っているようなイベントや集まりというのも札幌にはたくさんあると思います。フェアトレードでは、6月にフェアトレードフェスタを市民センターのほうでやっていましたので、そういうところに男女共同参画ということで顔を出してもテーマとしてはすごくリンクすると思います。

難しいかどうかを全く想定しないで勝手に話していますが、掛ける何とかというところでは、来てもらうのではなくて、出していくところも考えて、自分が興味・関心のあったテーマの中でも男女共同参画、ジェンダーの課題にこれだけ関わるのだと知ってもらうようなことを増やしていただくと、そこからこちらに流入するとか、次はそのイベントをエルプラザで開催しようと思ってもらったりとか、何かそういったところがあってもいいのかなと思った次第です。

3番目に、べたつく床ですけれども、これは、アウトリーチの話もありましたが、Aisyさんも含めて、一対一のミクロな取組をすごく頑張ってやっていらっしゃって、非常にたくさんあると思いますし、これからも増えてくると思います。ですから、このセンターとしては、ここは、自主でやるよりは、むしろ、そういう団体をどれだけ支援できるかという中間支援に絞って、実際に最前線で取組をやられるのは各団体で、その裏側を支えてあげることに注力するともしかしたらいいかもしれません。これは、私の一つの意見

ですが、例えば、岸本委員が自分で団体をつくりたいというところとか、学生さんだけではなくてもいいですけれども、そういった人たちを全面的にバックアップしたり、クラファンの支援のやり方の相談に乗るなど、いろいろなお金の話もそうだと思うので、そういう中間支援はまだまだ充実できるのではないかと思いました。

最後に、要望として、札幌市のことではないかもしれません、やはり、札幌ですから北海道の中心ではあると思いますので、先ほどのジェンダー統計のような話はすごくいいなと思いました。私も、ちょうど中富良野町で初めて男女共同参画のアンケート調査をしている最中ですが、そういったところで、北海道の各自治体の人たちも札幌に集ってその中で学べるように、そういうふうに北海道の中でのリーダーシップを取るような企画もどこか念頭に置いていただけたらなと。既に幾つかあるなと思いますが、何かそういったところで他自治体を巻き込めるようなものとか、その姿勢みたいなものがあると心強い thought たりしました。

意見ばかりでございますが、要望でございます。

○事務局（橋本主任） 今、企業というお話も出ていましたので、田中委員、お願ひします。

○田中委員 皆さんのお話は勉強になることが多い、聞いてばかりいてすみませんでした。本当に、企業側もいろいろやらなければいけないと感じていました。

一応、広告会社なので、ターゲットの話は私もすごく共感するところで、タイトル一つでもすごく考えられていることがすごく伝わってくる分、まだまだいろいろできることがあるのだろうなと感じていました。例えば、それこそ学習会の「噂の広告、何が問題？」の話などは、弊社にお声がけいただければ広告業協会の会員の皆さんにご案内することもできますし、こういうテーマはその業種ごとに結構あると思うので、そういう関係先も含めて、今、それこそジェンダー・コレクティブさんがやられていると思いますが、そういうものはどんどん広げられるだろうと思います。

ターゲットを明確にするというのは、いろいろな部分があって、そのことでかえって区別されてしまったりすることもありますから、私は、ターゲットを絞ったことで価値があるものもあるとは思いますけれども、困っている当事者向けのイベントとはまた別に、いろいろな関係者が一緒に考えるべきテーマもあって、表現を曖昧にしておくことでいろいろな人が集まるようなことも絶対に必要だと思います。その辺については、今の取組の全てに違和感があるとは全然感じなかったので、いろいろなテストをやってみて、こういう名前、こういう声のかけ方をするところいう人が集まるみたいなことをちょっとずつ積み上げていくしかないのかなと思ったりしています。

また、例えば、当社で言うと障がいのある方や、あるいは、L G B T、ジェンダー的には女性として生活しているけれども、体が男性である人などもいて、そういうジェンダーとの掛け合わせの話でもいろいろな切り口があると思います。多分、そういう人たちは、ただジェンダーの勉強会や研修会に行くよりは、もうちょっと自分に当事者性が近いとこ

ろに行ってしまうのかなと思ったりして、そういう人が漏れているとなると、やはり、細分化して障がいなどをテーマにしたイベントも必要だと思います。

そういう意味では、先ほどの社会性のあるイベントに出ていくような話にはすごく共感しますし、どの領域にもジェンダーというものが染みついていると思うので、そこに出でいくことはすごく効果があるのかなと思いました。困っている当事者目線のものと、広く集めることで価値のあるものがそれぞれに結構あるのかなと思うので、その視点を増やしながらやっていくことが結果的には成果につながるのかなと思ったりしています。

それから、データやジェンダー統計の話です。これも、企業側はすごく求めていることだったりします。私もいろいろな研修に参加させていただいたり、逆に菅原係長に講師として来ていただいたりしていますけれども、企業側も、今はどこの企業も不景気で、北海道は特に経済的にも苦しい状況の中で、それ以外にもまだ問題があるという企業が多くなっています。そういう中で、これは、すごく長い時間をかけてやるしか解決できないような課題がたくさんあるので、ちょっとずつでもやらなければいけないことだと思うのですが、企業の中では、今すぐやらなければいけないという意識が少ないところが多いと思います。小さい企業だったり、人手を割けない、研修に人を寄こせないような企業もあると思うので、そういうところこそ、経営者が、よし、やろうと思える要因はやはりデータだと思うのです。

当社で言うと、東京の本社というか、グループ会社で、例えば、ジェンダーギャップをいろいろな切り口で見たときに、どういうパーセンテージで女性が不利益を被るかというようなデータをネットで公開しておりまして、そういったデータがあることによって、当事者団体とか企業の方から、この数字のおかげで役員を説得できたという声をすごくいただいていまして、企業側はみんなでそういうデータを共有したほうがいい、報告したほうがいいというようなお話をありました。そういうことは、それこそジェンダー・コレクティブがやられているようにやっていくことがすごく大事だらうなと思っていました。

また、これは共有レベルのことですが、最近、北大の工学部さんが、工学を目指す女性が少ないという課題に着目して、私どもや北海道新聞さんとも一緒になって、「We are Enginee.」という名前で工学系の女性にフォーカスした企画を行いました。その企画を見て、たまたま道庁の知財室の方からご連絡があって、やはり、小・中学生の頃からそういうものを目指すような子どもたちを育成しなければいけない、そういう芽をつくっていかなければいけないというような話をいただきました。

今、企業側が直面しているジェンダーに関わる問題は、すぐに解決しなければいけないこともあります、5年、10年、20年とかかることまであらゆる面でたくさんあるので、改めて、短期的な、あるいは資本主義的なというか、企業の利益を追求するということ以上にやらなければいけないのだろうなとすごく感じています。

そういう中で、いろいろな団体や当事者性のある方たちとの議論をもっと増やさなければいけないと思っていますし、企業側にとっても、今まで見られていなかった視点をこう

いう交流会で出会う方からいただいたり、それならうちがお手伝いができるかもというようなことをもっと増やしていくかなければいけないのだろうということを感じていました。そのためにも、ジェンダー・コレクティブ北海道のような取組はすごくありがたいですし、企業側も、利益追求以外のいろいろな社会との関わり方というものを本当に探していくかなればいけないのだろうと思っています。

○事務局（橋本主任） 企業の目線で、業種ごとにアプローチするということや、データを使って企業にとって参加することで有益な情報を得られるという、そういった視点からのアプローチも必要なことだと感じました。

ほかにご意見のある方はいらっしゃいますか。

○横山委員 最後に、一つだけ、皆さんのやり取りをお聞きしていて、ここの表にどういうふうに織り込まれているのかなと気になることが一つだけあります、それは、文化的多様性とか、文化とか民族というところなのです。例えば、見えていることで言うと、北海道は外国人の人口が増えています、私の大学のある江別ではとても増えているということを聞いています。家族でやってきて、日本語がしゃべれないお母さんがいて、そして、子どもが小学校へ通っていて、DVもある、虐待もある、貧困もある、そういうような課題がいろいろあつたりします。また、見えていない文化的多様性ということで言うと、北海道は、やはり、アイヌということに対して、華やかな文化の部分はいいにしても、生活面では歴史的ないろいろなことがあって、見えていないところがありますよね。それから、先ほどの性的マイノリティーの話もそうです。

そういう文化的多様性とジェンダーの中で、ジェンダーだけを取り出すことはできないと言われますから、ここでそれがどんなふうに織り込まれているのだろう、いくのだろうというところについては、この事業をこんなふうにという提案は全くできませんが、やはり、これから必ず求められる視点だと思うので、発言しておきたいと思いました。

○事務局（橋本主任） それぞれの立場から様々なご意見をいただきまして、今回のテーマである強化すべき点といったところで、小学校にもっとアプローチするといったアウトリーチの部分のお話や、もう少しターゲットを明確にして伝え方を変えていく工夫が必要といった部分のご意見をいただけたと思っております。

皆様、貴重なご意見をありがとうございました。

短い時間ではございましたが、これで意見交換の時間は終了させていただきます。

5. その他

○事務局（佐藤主任） それでは、最後になりますが、札幌市男女共同参画センターの所管課となります札幌市市民文化局市民生活部男女共同参画室男女共同参画課の青田課長より、一言いただければと思います。

○青田委員 皆様、本日は、長時間、お疲れさまでした。活発なご意見をたくさん頂戴いたしまして、本当にありがとうございます。

それぞれのお立場で、稲葉委員からは、本当にたくさん質問をいただき、ご提案もいただきましたし、岸本委員からは、現役大学生の意見ということで、若い人はそういうふうに考えるのだなと、私も関口委員と同年代だと思いますので、片仮名が多いのは思つたりしたのですが、若い人にはやはりそれが刺さるところもあるのだなと思いましたし、田中委員からは、企業というお立場でいろいろお話しいただきました。また、波田地委員や横山委員から、我々も行っている、DVや困難を抱える女性への支援というものは、本当に我々行政だけではなく、民間の団体の方のお力添えをいただいてというところもありますので、本日は、我々行政としても皆さんのご意見をいただいて本当に勉強になるなというふうに思いました。ありがとうございます。

我々としても、いただいたご意見を参考にしながら、活動協会の皆さんと一緒にこのセンターの運営をよりよいものにしていきたいと考えておりますので、引き続き、皆様のご支援、ご協力をどうぞよろしくお願ひいたします。

本日は、ありがとうございました。

6. 閉　　会

○事務局（佐藤主任）　委員の皆様には、ご参加いただきまして、ありがとうございました。

今回の議事要旨につきましては、事前に皆様に内容をご確認いただいた後、男女共同参画センターホームページに掲載させていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

第2回運営協議会の実施は、来年2月頃を予定しております。

それでは、以上をもちまして、令和7年度第1回運営協議会を終了いたします。

皆様、本日はありがとうございました。

以　　上